

さぶりめんと

2025-Oct

No. 71

5-アミノレブリン酸を用いた治療
～膀胱がん発見をサポートするお薬～

泌尿器科 田 寛之

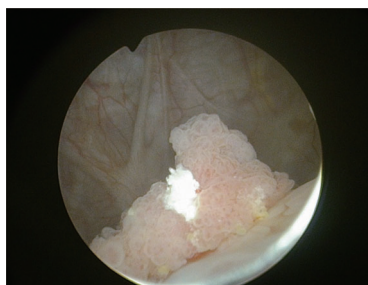
■ 膀胱がんの特徴

膀胱がんは、一般的に膀胱の内側にできるがんで、主にカメラ（内視鏡）を膀胱の中に入れて病変を削り取る手術（TUR-BT）が行われます。しかし、膀胱がんの中には人間の目では判別しづらいものもあり、小さなものや平らなタイプの病変がはっきりとわからないこともあります。

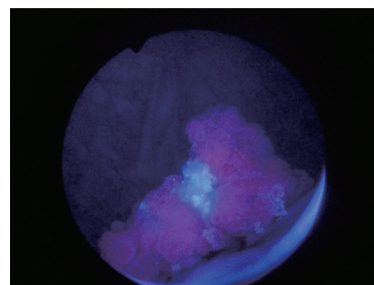
■ 5-アミノレブリン酸とは？

そこで登場したのが、「5-アミノレブリン酸」という飲み薬です。がん細胞がこれを吸収すると、体の中で光に反応しやすい物質に変わります。そして、特殊な青い光を当てると、がんの部分が赤く光るようになるのです。

この仕組みを使って、手術のときに病変をわかりやすくするのがこのお薬の役割です。特に、がんが再発しやすい人や、見つけにくいがんが疑われる人に使われます。



白色光による観察



特殊な青色光による観察

5-アミノレブリン酸の内服により
膀胱がんが赤く発光している（写真右）

■ 5-アミノレブリン酸を使用した治療方法

患者さんは、手術の数時間前に5-アミノレブリン酸を飲みます。そして手術中、青い光で膀胱の中を照らすと、普通の光ではわかりにくかった病変が赤く浮かび上がるため、より正確な観察と治療に繋げることができます。重い副作用は少ないとされますが、肝臓の数値が一時的に高くなったり、吐き気や光に対する敏感さなどが出る場合があります。特に、内服後は、体が光に敏感になっているため、手術後1日ほどは強い日差しや過度に明るい照明を避ける必要があります。

■ まとめ

5-アミノレブリン酸は、がんを直接治す薬ではありませんが、「見つける力」を高めるサポート役として、重要な役割を果たします。より正確な診断と、再発の減少に繋がる新しい技術として、全国の病院で使われ始めています。



関西ろうさい病院の理念

●● 良質な医療を働く人々に、地域の人々に、そして世界の人々のために ●●

病院運営の基本方針

- ・私たちは、働く人々の健康確保のための医療活動、即ち「勤労者医療」の中核的役割を担って、これを推進します。
- ・私たちは、高度急性期医療機関として良質で安全・高度な医療の提供を行うとともに、地域の諸機関と連携して地域医療の充実を図り「地域に生き、社会に応える病院」としての発展を目指します。
- ・私たちは、患者さんの権利を尊重し、医療の質の向上ならびに患者サービスの充実に励み、「信頼され、親しまれる病院」作りを心がけます。
- ・私たちは、「開かれた皆様の病院」として、ボランティアや有志の方々の病院運営への参加・協力を歓迎します。
- ・私たちは、病院使命の効果的な実現のために「働き甲斐のある職場」作りを行い、運営の効率化と経営の合理化を推進します。

イメージキャラクター
がんるっこ

さぶりめんと

2025-Oct

No. 71

ケロイド・肥厚性癬痕について

形成外科 石原 崇圭

■ ケロイドと肥厚性癬痕の違いは？

手術やけが、やけどの傷あとが赤く盛り上がり、かゆみや痛みを伴ったり、皮膚が引きつれるように感じる場合があります。これは「ケロイド」または「肥厚性癬痕」と呼ばれ、傷の治癒過程で炎症が長引き、コラーゲンが過剰に産生されることが原因とされています。

元の傷の範囲を超えて広がるものをケロイドといい、自然に治りにくく、放置すると拡大し症状も悪化する場合があります。一方、盛り上がり元傷の範囲内に留まるものを肥厚性癬痕といい、ケロイドと比べて時間経過とともに軽快することが多いため、少しかゆい程度であれば自然な経過と考えて医師に相談せずに様子を見ている方もおられます。



■ 主な原因

皮膚にかかる引っ張る力(張力)は、こうした症状を悪化させる大きな要因で、特に関節付近や腹部など動きの大きい部位では症状が現れやすい傾向があります。

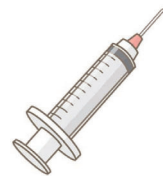
また、明らかな傷がなくても、胸や肩、上腕などに自然にケロイドが発生する体質の方もいます。

■ 治療方法

治療は、テープやシリコンシートなどによる圧迫療法、ステロイドの外用や注射による炎症の抑制が基本です。抗アレルギー薬の一種であるトラニラスト(内服薬)を併用することもあります。

症状が強い場合には手術も行われますが、単に切除するだけでなく、傷に張力がかかりにくくするためにジグザグに縫合したり、また術後に放射線治療を併用する場合もあります。

このように複数の方法を組み合わせて治療を行っても再発する難治例がある一方、侵襲的な治療を行わずに改善するケースもあります。病院での治療だけでなく、ご自宅でのケアも重要となります。



■ まとめ

症状の程度や部位によって適切な対応は異なります。

傷あとの盛り上がり、引きつれ、痛みなどでお困りの際は、お気軽に形成外科にご相談ください。

